

森の木魂（こだま）

2021 年 7 月 24 日発行 第 3 号



・森に寄り添って暮らす私たち	1	・衣食住に忍び寄り気候変動の脅威	10
・第 2 回総会報告	2	・ポーランドと日本に桜を植えた友との別れ	11
・持続可能な生存を求めて温暖化にブレーキをかける	4	・ふるさとの木による森づくり in アメリカ	12
・全ての人が心をひとつにできる脱炭素社会	5	・10 年間の出会いは希望への烽火(のろし)	13
・未来の命を育む足尾・里親植樹	6	・伝統野菜「舟石芋」と「唐風呂大根」を育てる足尾の森	14
・足尾・「孤高のブナ」が後世に遺すメッセージ	7	・足尾の植物と生活?	15
・負の遺産をポストコロナ社会の知恵に	8	・森は友だち・編集後記	16
・私にとっての変化を社会へ活かしたい	9		

森に寄り添って暮らす私たち

新生・森びとプロジェクトは 2021 年度の事業をスタートさせました。地球を健全にしていく活動は緊急課題ですので、私たちは大事な森づくりを愚直に継続していきます。文明の岐路に立っている私たちは、人類の生存を持続させていくために、改めて地球で生きている私たちの足元の自然をみつめ直す必要があると思います。

日本の国土は面積の 66% が森林で占められています。国際比較ではフィンランドに次いで第二位だそうです。森の内訳は約 4 割が人工林、5 割が天然林です。天然林の多くは薪炭林など、コナラやミズナラの二次林で、ブナ林などの自然林は極めて少なく、里山が二次林で、奥山に自然林が残されています。人工林はスギ、ヒノキ、カラマツ、アカマツなどの針葉樹が圧倒的に多くを占めています。したがって 4 割が針葉樹林、5 割が広葉樹林という比較も成り立ちます。針葉樹人工林がこれほど多くの割合を占めていても、見慣れた風景で驚きに値しません。このような風景は、実は歴史始まって以来のことと、とくに戦後の拡大造林政策によって広がったのです。私が四国や中国地方でブナ林の調査を行っていた 1980 年当初にもあちこちでチェーンソーの音が鳴り響き、ブナ林の皆伐地にスギやヒノキが植えられていました。

スギ、ヒノキ、カラマツ、アカマツは日本の自生種です。スギの自生地では屋久島が有名ですが、年間降水量が 6,000 mm を越え、花崗岩からなる山体は洗い流されるように痩せており、厳しい環境に晒されています。屋久島にはスギの競争相手となるブナ

科の広葉樹がないこともスギ林を成立させる要因となっています。ヒノキの自生地も溪谷に臨む急峻な断崖地で、空中湿度の高い岩角地に見られます。アカマツは日当たりの良い断崖、クロマツは海岸風衝地と、いずれも厳しい立地に限られます。これは競争力のある広葉樹との競合を避けて厳しい場所で生き延びているからだと言われています。そのような針葉樹を広葉樹があった土壌環境の良い場所に植えれば、良く育つのは当たり前です。ただし本来の生育場所ではないために競争力の強い広葉樹を刈り払うなどの管理が必要となりますが、国の重要な林業の地位を占めるに至りました。

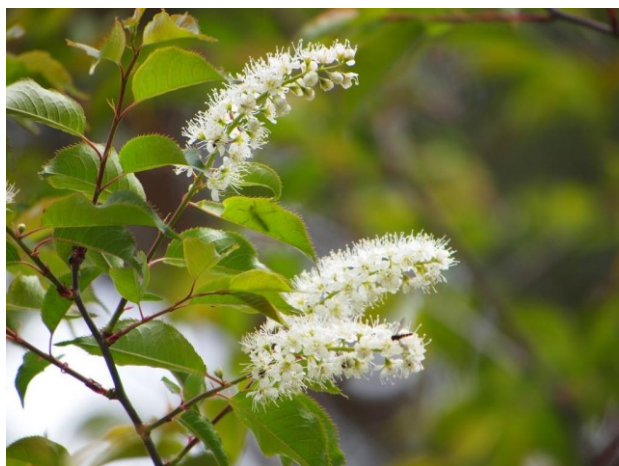
建築 100 年以上の古民家を調べると、その部材は広葉樹が多く、クリ、コナラ類、ブナ、ハリギリ、サクラ類、カエデ類、トチノキ等が使われています。江戸時代の頃は薪炭林が広がり、奥山にはブナ林など、広葉樹林が森林景観の多くを占めていたのもうなづけます。日本本来の自然林は、暖温帯から冷温帯まで広葉樹林で、生物多様性、地上部現存量、水源涵養機能、そして光合成量、すなわち炭素の吸収量と蓄積量において優れているばかりか、山菜、癒し、様々な恩恵を私たちにもたらしてくれます。

まさに公益的機能の総合デパート、持続可能な生存を考える時、育林の困難な山奥の針葉樹植林を広葉樹林に転換していく、広葉樹の森づくりの重要性がお分かりいただけるかと思います。

代表 中村幸人

第2回総会報告

2021 年度の“山と心に木を植える”事業計画と予算、運営委員が決まりました



6月26日開催予定でした第2回総会は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、書面での議決としました。正会員の皆様には5月25日に議案書と議決権行使書等を送付し、6月20日必着で議決権行使書を提出していただきました。お忙しい中、議決権行使書の提出にご協力いただきまして、ありがとうございました。

6月26日は、運営委員、アドバイザー、顧問、森づくりチームスタッフの正会員13名が目黒さつきビル会議室に集まり、第2回総会は正会員353名中276名が議決権を行使したことを確認し、規約第19条に基づき、第2回総会が成立していることを確認しました。

議案の賛否の結果は、第1号議案・2020年度活動経過報告については賛成276・否決0、第2号議案・2020年度収支決算報告及び会計監査報告について

は賛成276・否決0、第3号議案・2021年度活動方針（案）については賛成276・否決0、第4号議案・2021年度予算（案）については賛成275・否決0、第5号議案・規約の一部改正については賛成276・否決0、第6号議案・運営委員、会計監査員の選任については賛成276・否決0でした。また、ハガキによる議決権行使書にはあらかじめ「賛否の表示をしない場合は、賛成として取り扱うこととします。」と伝えておりますので、353名全員から賛成をいただきました。

議長に選出された済賀正文さんからは、「第2回総会宛に70件の意見が届けられているので、後ほどの運営委員会でこれらの意見を尊重し、今後の事業に反映させるために議論していただき、その見解を報告して欲しい」と提案があり、運営委員会はそれを了承しました。

総会后、第1回運営委員会を開催し、2021年度の役員体制を決定し、新事業計画の補強議論を行いました。役員体制は下記の通りです。

新型コロナウイルス収束は不透明ですが、気候変動による異常気象の猛威は私たちの暮らしを脅かしています。私たちは、引き続き会員の皆さんとのスクラムを組み、“山と心に木を植える活動”をすすめていきます。総会にメッセージ、意見を送ってくれた会員の皆さんに心から感謝申し上げます。

運営委員 小林敬

<役員体制>

顧問	宮脇昭
顧問	高橋佳夫
代表	中村幸人
副代表	清水卓
運営委員	井上康
運営委員	大野昭彦
運営委員	小黑伸也
運営委員	小林敬
運営委員	太宰初夏

生態アドバイザー	島野智之
森林アドバイザー	川端省三
政治アドバイザー	山崎誠
科学アドバイザー	倉澤治雄
会計監査員	高橋よし子
会計監査員	小黑久美子

第2回総会報告

総会には 70 名の会員からメッセージと発言が送られてきました。コロナ禍での命を育む活動に対する激励、そして共に頑張る意思表示、持続的に活動ができる予算執行に期待する意見と決意等が寄せられました。運営委員会は、皆様のご意見に応える活動と組織運営を行っていきます。ご意見に感謝申し上げます。以下は、発言を送ってくれた3氏の意見をまとめましたので紹介します。

秋田県 船木藤典

温暖化の影響が駆け足で私たちの生活に迫ってきていると感じています。雪国の秋田では、一晩に大量の雪が降る、雪の質が重い、春先に降る雪の状態が寒中にみられる。冬の気温がマイナス 10℃程の日が少なく、寒さが続かない、春と秋の季節も短い、紅葉が薄く、葉の色は茶色に焼けていように感じています。子供の頃にはなかった現象です。6月、横手市では気温が 34 度になりましたが、大木の下は天然のクーラーです。エアコンの涼しさとは違う木陰のクーラーに癒されるのは有難く感じます。

森に囲まれて生活している私たちは、山菜やキノコは森の恵みで有難いと思っている方は多いのですが、何気なく吸っている酸素が森の木々が供給しているという有難みを感じることが希薄になりがちです。農作物や自然の恵みの出来栄えに変化が見えても、

2050 年排出ゼロに向けては政治家と行政のやることだ、という意識に流されている方々が多い気がします。

このような地域社会で温暖化にブレーキをかけていくうねりをつくりだすことは難儀ですが、できるだけ背伸びをしてその波紋を大きくしていくことにします。

栃木県 加賀春吾

政府や企業は 2050 年カーボンニュートラルを目指した開発をアピールしていますが、それは経済成長のための技術発達に軸がおかれているように見えます。昨年 12 月、栃木県議会では知事が 2050 年カ

ーボンニュートラルの表明をしました。議会内には「グリーン社会実現特別委員会」が設置されましたが、目新しい政策は掲げられていません。

この課題は地方行政のかじ取りと市民の理解・協力がとても大切ですので、私たちは県議会の政策をつかみ、市民の要望を県議会に提出しなければと考えています。その中身は7月中に提出し、9月の県議会で議論していただければと思っています。全県民による木を植える運動をスタートさせて、何としても生存を脅かす世紀末を迎えないようにしたいものです。

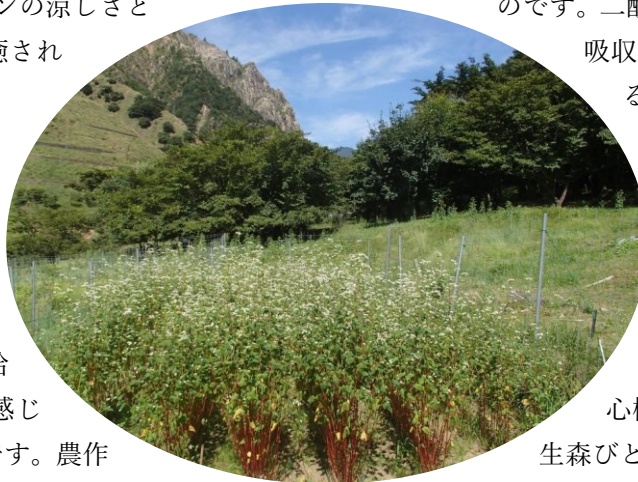
二酸化炭素排出を削減し、木の吸収力を高めてバランスをとれる県のビジョンが実現できるように、県民の社会運動にチャレンジしていきます。

東京都 松井富夫

東京ファンクラブは開店休業でありました。先月、心機一転した森とも 5 名で新生森びとプロジェクトのファンクラブを結成しました。

ポストコロナ社会を考えると、気候変動問題は意思した人がやらなければなりません。それは一人から始まりますが、当ファンクラブは活動を 5 名でスタートさせました。

まずは木を植えることから始まり、里親植樹への参加者を募っています。私が住む三多摩地域で社会運動を行っている方々へ呼びかけたところ、8 名の方々から 11 口の申し込みがありました。また、「足尾の森を見てみたい」、「草刈りもやってみたい」という声をいただき、その計画を立てています。木を植え、地球で生きていくことを話し合い、できることを拡げていければと思っています。





持続可能な生存を求めて温暖化にブレーキをかける

第2回総会に向けて、森びと通信『森の木魂』を送付した正会員、賛助会員等の590名の皆さんにアンケートの協力を呼びかけました。「地球温暖化にブレーキをかけるアンケート」に協力してくれた会員は127名でした。ご協力にお礼申し上げます。第1回運営委員会は、このアンケート結果に関して、今後の活動に活かしていくために議論を行いました。

回収率は22%程でした。残念な回収率ですが、運営委員会はアンケートの協力呼びかけ方や回収方法、会員と私たちの心をひとつにする取組みの再考が求められました。

アンケート結果では、「温暖化による生活環境の変化や気象の異常を身近に感じている」、「このままの生活を続けていくと生存が不安定になる」、「温暖化の要因は経済と政治にある」、「温室効果ガスを削減するためには化石燃料から自然・再生可能エネルギーへの転換が必要だ。原発には頼らない」、「温暖化にブレーキをかけていくには市民が集まって話し合い、市民の声を国や行政に反映させるべき」という趣旨の質問に「はい」と答えてくれた方が125名～127名おりました。

国際的には一般化している「2050年までに二酸化炭素排出実質ゼロを実行すべき」という問いに対しては、「はい」と答えた方が101名、「わからない」と答えた方が20名いました。また、温暖化防止のために「実行していることがある」と答えた方は98名、「ない」と答えた方は29名いました。

温暖化対策は中央地方行政と前向きな企業がすすめていますが、そのために国民は納税していることを「知っていますか」と問うと、「はい」と答えた方が50名、「いいえ」と答えた方が71名いました。さらに、あなたの住む県や自治体は「2050年までに二酸化炭素排出実質ゼロを表明していることを知っていますか」の問いに対しては、「わからない」という方が71名、「いいえ」という方が35名、「はい」と答えた方が19名でした。

回答してくれた方々からは、温暖化による異常気象を身近に感じ、このままの生活を続けていくと生存が不安定になると心配しているようです。対策に関しては、普段から対策を実行している人が7割の方がいました。反面、環境税や政府や地方自治体の温暖化対策には目が向いていないようであり、温暖化対策にブレーキをかけていくことは“他人ごと”のようにとらえている感じがしました。

私たちがこれからもこの地球で生存していく基盤を持続させていくには、“自分のこと”として気候変動と向き合わなければなりません。運営委員会は、アンケート結果で感じたことをベースに、各県の森びとファンクラブの皆さん、会員の皆さんとの話し合いを通じて、持続可能な生存を求めて、温暖化にブレーキをかけていく心をひとつにしていきたいと願っています。改めて、アンケートに答えてくれた会員の皆様に感謝いたします。



全ての人が心をひとつにできる脱炭素社会

世界各国は脱炭素社会実現へ急発進しているようです。会員の皆さんは、気候変動による生活環境の変化や異常気象の猛威を身近に感じています。主要国の首脳も気候変動対策を最重要課題として捉え、「2050年カーボンニュートラル」の実現を目指しています。6月に開催された主要7カ国首脳会議（G7サミット）では、温室効果ガス排出を「30年までに10年比で半減させる」ことを首脳宣言に明記しました。また、石炭火力発電は「政府による新規の直接支援を21年末までに止める」と表明しました。

日本では、「改正地球温暖化対策推進法」（5月）が成立し、国民は温暖化防止策に協力する義務を負いました。政府は2050年排出実質ゼロに向けた技術開発を推進する企業への支援をすすめる、日銀も企業などの資金調達支援を行うことにしました。

気候変動対策は、これからもこの地球で持続的に生存するためには避けて通れない重要課題で、それは人類の責務だと思います。しかし、「脱炭素社会」のためだからと言って、再エネを作るために命を育む基盤（地球の生態系）を衰弱させてはなりません。再生可能エネルギーは儲かるからと言って、生態系に負荷をかけ、壊してはなりません。また、脱炭素社会だからと言って、社会的弱者に不利益、不平等なことを強いることは避けなければなりません。国際的には、先進国の生活スタイルを先住民に押し付

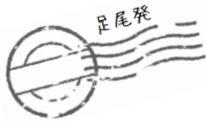
けるようなことは避けなければなりません。

化石燃料から再生可能エネルギーへの転換は生活に直結します。水素エネルギーの生産・運搬そして消費に至るまで、私たちの生活現場と労働現場には様々な変化が生じるのではないのでしょうか。電気料金、水素燃料代、水素自動車代、住宅のリニューアル代、移動手段の料金等、脱炭素社会の不透明な部分を解明する課題がこの社会には孕んでいます。

一方、気候変動による異常気象の猛威は毎年巨大化していますので、温室効果ガスの吸収源である森林を健全にする活動は継続しなければなりません。政府の森林・林業事業計画では「国民参加の森林づくり」が計画され、10年間で1億本植樹を目指す国民運動が目指されています。私たちはこれまでの森づくり活動を継続していきますが、人間が一年間に排出する二酸化炭素量を吸収する木（一人30本）を植える国民運動を政府へ求めています。

化石燃料から再生可能エネルギーへの転換が世界的な潮流となる中で、やれることは小さいことですが、やっていこうとすることは持続可能な生存の基盤である地球（生態系）を健全にしていくことです。7月からは各県ファンクラブとの話し合いを深め、会員の皆さん、地域の皆さんと共に、脱炭素社会へ向けた事業がスタートできればと願っています。

運営委員 大野昭彦



足尾発！

未来の命を育む足尾・里親植樹



5月19日、荒廃地に植樹を希望したい皆さんに代わって森びとスタッフが木を植える「里親植樹」がスタートしました。新型コロナウイルス感染拡大を防ぐことを第一にして、多くの皆さんに植樹活動を遠慮していただいている中で、それでも地球温暖化にブレーキをかけたいと植樹を希望する方に代わり、森びとスタッフが木を植え、育てる事業が「里親植樹」です。

植樹地は足尾・松木村跡の急斜面の草地。苗木を植える土留め柵は森びとスタッフの手作りです。草と岩だらけの斜面に、製材後の板を鉄筋で押さえて土留めを造ります。そこを唐鍬やスコップで岩や石ころをかき出し、荷揚げした20リットルの黒土と腐葉土を砂地に混ぜ、植樹地にしました。

急傾斜の植樹地では、植えられた幼木は動くことができません。他の草木と競争し、我慢し、共生しながら生長していきます。その手助けをするのが森びとスタッフです。7月からは草刈りです。草は一気に大きくなり、幼木の背丈よりも高くなり、太陽の恵みを独り占めにしようとします。草刈りは草と一緒に苗木を伐ってしまう恐れが強いため、鎌の手作業です。スタッフは炎天下で、一本一本丁寧に苗木の周りの草を刈り、ウサギ等の動物の食害をもチェックしていきます。

事務所には、「里親植樹」に参加した方から、「里親植樹をしたことの証明証に苗木が印刷され、植樹したことを実感しています」、「絵葉書が届きました。それを見ていると本当に“親”になる気分です。丁寧にさせていただいてどうも有難うございます。」というメールやラインが届いています。

また、足尾の現場で木を植えてくれた西垣さんは、「何か出来ることはないかと考えていました。スタッフと一緒に木を植えて、やる気が出ました。」と言ってくれました。

私たちは持続可能な生存を願い、この地球を健全に出来ないかと木を植えています。やれることは小さいですが、未来を生きる人間の命と希望を繋ぐ地球の恵みを後世に遺していきたいと思っています。

副代表 清水卓

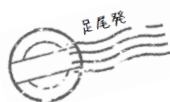
★5月参加者：千葉県（石川尚吾）、埼玉県（渡辺好和、柳原周治郎、西垣栄義、土田利男、村田俊雄）、群馬県（高橋佳夫、高橋よし子）、神奈川県（伴在昭典、小林敬）、東京都（奥村隆夫、村上馨、千葉勝也、奈良直子、小黑伸也）

★6月参加者：青森県（高杉貢、武田太希）、秋田県（大山博延、船木藤典）、岩手県（浅沼宏優）、宮城県（佐藤秀一）、福島県（林雄一）、茨城県（宮田光良、大津崇、仁平義範）、長野県（井上康）、栃木県（関原和人、小室光夫、橋倉喜一、清水卓、清水久子、清水朋佳、清水明日香、深津哲）、埼玉県（山田知、加藤誠、小森富貴子、田崎聡、上原潤一、福田潤一、小川哲、江添隼人）、神奈川県（佐藤英樹、重久拓也、中村幸人）、群馬県（高橋佳夫、高橋よし子）、千葉県（下村悟史、久能裕一、長谷理生、鈴木佳織、武田芳明、武田政江）、東京都（佐藤伸也、高橋孝一、湯ノ目亜矢子、杉本博輝、松井富夫、松井恵子）（順不同・敬称略）

★本数：5月 101本、6月 87本

★樹種：ミズナラ、ブナ、コブシ、ハウチワカエデ、ヤマモミジ、シラカンバ、ウワミズザクラ、クヌギ、エゴノキ、トチノキ、ハクウンボク等。

この事業は公益財団法人イオン環境財団の助成金に支えられています。



足尾発！

足尾・「孤高のブナ」が後世に遺すメッセージ



私たちは、「中倉山のブナを元気にする恩送り」を6月5日(土)に実施しました。新型コロナウイルス感染拡大と雨天で再延期が心配でしたが、イベントではなく希望者による保護活動にしました。

毎年土砂流出が拡大していることを目の当たりにして、私たちはコロナ感染防止に気を付けて、雨上がりの中倉山を安全第一で登りました。朝7時に集まってくれた方々は男女14名の森とも。2018年から続けている草の力を借りた土砂流出防止の土運び揚げです。60数年前から行われている手法を真似て、草の種が入った植生袋に培養土を詰め、中倉山の松木川の北側のガレ場に植生袋をピンで刺す作業で、当日は、植生袋26袋をガレ場に張ることができました。森びと会員の荒川さんとそのグループ、JR東労組大宮の山岳部の皆さん、取材で同行してくれました下野新聞社・鈴木記者、そして森びと関係者の皆さん、大変お疲れさまでした。心よりお礼申し上げます。

協力してくれたある方は、「1本の木を守ることに疑問があったが、現地に立って森作業を振り返ってみると、足尾の自然を守るために必要と感じました」と述べてくれました。この感想を伺い、準備をしてきた一人として、私はとても嬉しくなりました。

翌日の『下野新聞』では、「孤高のブナ後世に」との見出しで報道されていましたが、私が後世に遺したいことは、「孤高のブナ」のメッセージです。

ブナは語ることはできませんが、棲息限界の地に

生きるブナが暴風や大雨に耐え抜いていること、稜線の北側はガレ場で雪解けや大雨で毎年土砂流出が起こり、反面、南側はミズナラ、シラカンバ等が森の機能を果たして雨を地中に溜め、二酸化炭素を吸収し、綺麗な酸素を排出しています。稜線の北と南側では生態系の差を感じ、四季折々の自然の素晴らしさの感動の違いも感じられます。このブナは多分、“南側の仲間たちと共に地球を元気にさせてほしい”とささやいているのではないかと思います。

ここ数年、足尾の森作業をしていると、「孤高のブナ」を訪れている方々が目につきます。私は、語り掛けることのできないこのブナを、「無言の語り木」と称し、このブナが少しでも長生きできる環境を整え、足尾銅山煙害を生き抜いている姿を多くの皆さんに見せ続けてほしいと願っています。

森づくりスタッフ 済賀正文



森の仲間たち



負の遺産をポストコロナ社会の知恵に

昨年、私が住む近くの川が大雨の影響で氾濫し、道路が冠水しました。初めて大雨の恐ろしさを感じ、地球温暖化の猛威が身近な問題だと気づかされました。

以来、森びとプロジェクトのインストラクターとして、何をすればよいのかとモヤモヤしている日が続いていました。そんな時、足尾・中倉山のブナ保護の話があり、まずは現場に立ってみてから考えることにしました。

中倉山現地では、森びとスタッフから「ここ数年、登山者が増えている」ことを聞きました。確かに中倉山に登ってみると、山頂から西へ向けてた稜線を眺めるとアルプスの雰囲気があり、「足尾アルプスだ」ということが頷けます。しかし、私はそれだけで登山者が増えているとは思えませんでした。

登山口からはリョウブ、シラカンバの林、その後はトチノキ、ミズナラ、カエデ、ツツジ等が茂る森を登り、稜線に出ると森とは真逆のガレ場が目の前に表れます。足尾銅山の歴史を知る方ならば、煙害や火災によってハゲ山になってしまった様子が目に浮かびます。この中倉山の北側斜面のガレ場と南側の草地の境界線に必死になって生き延びているのが「孤高のブナ」です。足尾銅山の負の遺産という視点からこのブナを見ると、登山者はブナから何かを語り掛けられているように感じるのではないかと思います。

ます。私は足尾の歴史を少しかじりましたので、当時の人間の行為を振り返ることができます。

言うまでもありませんが通電には銅が欠かせませんし、弾薬製造にも銅は重要な資源でした。当時の日本の発展には欠かせない資源であり、政府は国をあげて東洋一の生産量を誇る足尾銅山にしました。

その当時の「国家・国民のため」という潮流は、やがて村人の糧と集落を奪い、下流では汚染物質によって農民の暮らしを苦しめました。ハゲ山になったことで足尾周辺に雨が降ると、渡良瀬川下流域では洪水が起こり、その雨水は魚や米を食べられなくなりました。

この時季、日本では毎年、大雨による災害を心配しなければならなくなっています。これは世界中に起こっており、世界中の人々は異常気象に怯えた暮らしを強いられています。私が思うに、足尾の負の歴史が今では、世界中で起こり、それも巨大化しているのではないかと感じています。

「脱炭素社会は人類のため」ですが、「脱炭素社会のため」だからと言って、盲目的になってはならないのではないかと思います。「脱炭素社会」へ舵をきらなければなりません、炭素を吸収するのは森であり海洋です。「孤高のブナ」は森に生かれていることを忘れるなど、私に言っているようでした。

会員 矢野雅之

森の仲間たち

私にとっての変化を社会へ活かしたい



私は、北海道旭川市で生まれ育ち、米国の自然の多いカリフォルニア州の田舎町で人生の約半分を過ごしてきました。旭川の頃は、私が住んでいた周辺にはコンビニもなく、夜は早々と店が閉まり、家で家族と過ごすことが多い日々でした。今は、24時間お店は開き、ものすごい量のエネルギーが一日中放出されています。

人間は自然の一部ですので、その基本は朝起きて、夜寝ることが自然のはずです。しかし、そのようになっていないのが現代の私たちの生活ではないかと思います。地震、大型台風、甚大化する大雨、記憶にない大型の竜巻などは、これまで豊かな生活を求めて自然を破壊しつくした人間のツケが、一気に人間社会に迫ってきているのだと思います。

SDGsの13番目に「気候変動に具体的な対策を」という目標が掲げられています。気候変動によって引き起こされる深刻な自然災害を軽減するためのもので、全世界で取り組む目標です。CO2などの温室効果ガスなどによって引き起こされている地球温暖化は世界中の人々が想像していたよりも深刻に、そしてスピード感を増して暮らしを脅かしています。

スウェーデンの18歳の少女グレタさんは、「変化をもたらすのに未熟すぎるなんてことはない」と

言っています。彼女のメッセージを大人はどう受け止め、どう発信していけばよいのでしょうか。今、求められていることは、その発信する彼女の勇気を大人たちも受け止め、学び、行動に移すことではないかと思います。

また、地球温暖化は色々な問題を引き起こしています。例えば、気温上昇による海面の上昇、西日本豪雨災害、熱波による干ばつや土壌劣化とそれによる水不足や食料不安等による生存の不安です。このような情報は、日本ではその事実を問題視する報道がほとんどみられません。不安材料が増えるときにはいつでも、経済の混乱によって紛争やテロが引き起こされます。だから、環境問題をもっと真剣に取り組まなければならないことを『森の木魂』を読んで改めて気づかされました。

森びとプロジェクトの皆さんが、「里親植樹」を始めました。私も木を1本ですけれど植えてもらいます。たった1本かもしれないけれど、それは私にとっての間違いのない変化であり、これからその1本1本を積み重ねていきます。温暖化を防ぎ自然を取り戻すことは理屈ではありません。1つ1つの積み重ねと行動が大切だと思います。

会員 武川知子

ファンクラブ通信

衣食住に忍び寄る気候変動の脅威

私が北海道から千葉県に移住して34年が経ちました。当時の千葉はジメジメした暑さと人の多さに戸惑う生活が続いていました。そんな時、友人から、「足尾で木を植える活動があるので行ってみない？」と誘いをうけ、少し刺激が欲しいと思っていたので参加することにしました。

足尾に行ってみて、ビックリ！このような荒地に木を植えて育つのかなと思いつつ、この時代に殺風景な所があることに驚きました。その後、森びとインストラクター養成にもチャレンジし、森づくりの基礎を学ぶことができました。現役をリタイアした今、足尾の森づくりで学んだことを、千葉県南房総にある「花嫁街道」の整備活動に活かすことができました。この地が「森びと千葉県ファンクラブ」の出発点ではないかと思っています。

房総半島は海に囲まれ、その海には豊かな森から栄養豊富なミネラルが海に流れ込み、海洋では黒潮が運んだ栄養分をたっぷりの海水が流れ込んでいます。その恵みを受けて、アジ、伊勢エビ、アワビ、岩ガキ等、海の幸が宝庫なところですよ。

ところが巨大台風や大雨、そして海水温度の上昇により、地元の漁業にも悪い影響が出ています。反面、台風が森に叩きつける潮風によって、森には嬉しい変化が出ています。一昨年の台風19号の塩害と聞かれますが、「花嫁街道」周辺の常緑樹の葉は枯れ、スギやヒノキも一部枯れました。森の中にできた陽が差し場所には、土地本来のスダジイ、ユズリハ、モチノキ等の実生が顔を出しています。極僅だったスマイレも林床一面に花を咲かせています。

サンマ、スルメイカ、サケ類の漁獲量が激減になり、漁民の生活や魚好きの私たちの食卓にも不安がでています。温暖化で海水温度が上昇し、魚種の分布域が変化し、魚が獲れなくなっています。和田浦港では、ツチクジラを捕獲していますが、漁民は分布域が遠くなり、燃料代が高み、漁業の経費が圧迫

されています。これらの状況に対して、政府は不漁の要因を地球温暖化、海流の変化などの気候変動であると特定し、水産庁はその対策にのりだしました。漁民の生活の糧、美味しい海の幸を食卓から消さないためには政府の政策から目が離せません。

これからもこの地球上で私たちが生きていくためには社会の主役である私たちは、森に生かされているという現実から政治を監視していかなければならないと思っています。と同時に、私たちもできることをやっていかなくてはなりません。局地的な大雨による被害、猛暑による熱中症等に向き合うことは勿論ですが、世紀末に安心できる暮らしが見通せるように、大地の森と海を元気にさせなければと思います。

森びと千葉県ファンクラブができることは小さいことですが、志は大きく持って、「花嫁街道」を歩きながら、一本でも多くの木を植え、房総の海を元気にしていきたいと願っています。

千葉県 FC 武田芳明



心のふるさと探し

ポーランドと日本に桜を植えた友との別れ



森びと広場で一番早く開花する桜がフジザクラ。目立たない小さい花がいっぱい咲く。この時季、足尾・松木沢では、フジザクラ以外の桜は咲いていないので、餌が少ない時季でのヒヨドリ、メジロや猿は蜜を舐めにやってくる。とくに猿は群れてやってきて、小さな花を食べてしまうが、その様子を観ていると北海道の友を思い出す。

この桜は10年前に北海道から送られてきた。種から苗木を育て、北海道内の学校に寄贈してきた故・山崎正夫さんから送られた苗木である。山崎さんとお会いして、森づくりで意気投合できたのは20年数年も前の事。その場を作ってくれたのが「MS会」の本田さんと樋口正行さんだった。樋口さんが4月9日にご逝去された。当日、携帯電話に樋口さんから着信があり、折り返し電話すると娘さんが出て、「朝、お父さんが亡くなった」との突然の知らせに、私は言葉を失った。

彼とは現役時代からの友人。互いに、現役からリタイアした後の社会運動を通じての付き合い。彼は、28年間の社会運動で、北海道と足尾、そしてポーランドに桜を植えた。

旭川市内に住む彼は、環境市民団体「MS会」（マザー&シスターズ）の自称広報マンであった。

「MS会」は30年以上も旭川市内に桜を植えている団体で、彼の所属する労組と私が所属していた労組の社会運動でも連携していた。市民団体と労働組合の連携による社会運動は、当時の社会で労働運動が霞んで見えなくなっていた中で、その運動はとて

も新鮮であった。その時の「MS会」と労組の窓口を担当していたのが樋口さんだった。

女性会員が多い「MS会」の皆さんの心と、労組組合員の心をひとつにして社会運動を20年間以上もけん引することの難しさを考えてみると、その苦勞と献身性は頭が下がるし、樋口さんの果たした役割は大きい。心から敬意を表したい。

1994年から10年間も続けた「旅のプレゼント」。心身にハンディキャップのある方々への寝台列車と飛行機による3泊4日の旅のサポート。労組の取り組みではあったが、多くの市民も協力を惜しまなかった。このことも樋口さんの存在は大きい。

ポーランドのワレサ大統領（当時）から招待された文化交流では、ショパンの生家、大統領府庭園、ヴァベル城庭園に桜を植えた「MS会」をサポートした彼。そして、足尾の植樹祭には、2006年から4回も参加してくださり、「MS会」を引率してきた樋口さん。

屈託のない性格をもち、意見は明確に発し、言ったことには責任をもって実行に移してきた彼は、「MS会」の番頭さんのようであった。ポストコロナ社会へ向けた社会運動はこれからだという時の悲しみは、残念でならない。合掌。

森びと顧問 高橋佳夫



後列左から3人目が樋口さん（2014年足尾にて）

地球発！

ふるさとの木による森づくり in アメリカ



ミシガン大で外来種を取り除く
作業をするエミリー

2018年の5月、私たちはアメリカ・ミシガン大学生たちと足尾・松木沢に木を植え、森づくり活動の交流を行いました。その時に知り合ったエミリーさんからメールが届きました。



私(ミシガン大大学院で産業衛生を研究する環境健康科学プログラムの1年生)は、大学院への出願の際に足尾の訪問について書きました。

そのレポートの一部には、「足尾の負の遺産というものは、環境への過失と虐待によって長期的に引き起こされた結果であり、恐ろしくも哀しいリマインダーである」と書きました。そして私は環境科学者として、私たちの社会インフラを維持する責任を負う人々と同じように、環境の健全性を護る責務を持ちたいと思っています。

2018年の足尾での経験は、私が自然環境との対話にもっと気を配るような自分に刺激を与えてくれました。「Forest'n People Project」(森びと)との出会い以降、私は庭に6本の木を植えました。昨年に3本、今春は3本を植えました。今後も自分の地域に自生する樹木や植物を植えてゆく予定です。

わたしは、4月のアースデイには、ミシガン大学の学生と一緒に私は、川沿いの自然地域の世話をするのを手伝いました。今、私たちは「2030年までに炭素排出量を削減する」というバイデンの米国へのコミットメントを祝うことはできますが、やるべ

きことはまだ沢山残っています。森びとの皆さんや日本の皆さんも、次世代のために自然環境への配慮に取り組んでいることを知って、心から嬉しく思います。

現在、私は、ミシガン大の新入生たちと、地元へ侵入してきた外来種(ハナダイコンとニンニクガラシ)を取り除くなどの活動をしています。この活動は「持続可能な生活体験」と呼ばれる住宅学習プログラムです。

ミシガン大学大学院エミリーさんより

翻訳 太宰初夏

風のささやき



写真は北海道上川郡剣淵町の「ビバアルパカ牧場」です。毎日、アルパカたちと生活しています。訪れる方々は少なく、寂しい毎日ですが、アルパカたちと新しい日常を求めて、草刈りをしています。森ともの皆様とお会いできることを楽しみにしています(会員 井下佳和)。

足尾発

10 年間の出会いは希望への烽火(のろし)



閉舎中の遊働楽舎

「山と心に木を植える」とは、法人森びとからのスローガン。山に木を植えながら人間の心にもその気持ちを植えていかなければ、再び、森をハゲ山にする悲しい歴史を繰り返す。そうさせないためのスローガンは新生森びとでも受け継がれている。

足尾・松木沢の荒廃地に木を植えて5年後、森づくりを通じて教えられた森の魅力を伝えようと、「遊働楽舎」（愛称名：みちくさ）をオープンした。今から10年前の5月14日であった。

この年の3月には、東日本大震災・フクシマ原発事故が起きた。「みちくさ」はその2カ月後のオープンであった。初めて体験した自然災害と人災に向き合おうと、私たちは4月から6月の間、岩手県、宮城県、福島県の被災地に立って救援ボランティアを体験させていただいた。その体験で得た事は「みちくさ」オープンに活かした。2011年から3年間の森づくりには子供たちの参加は遠慮してもらった。その根拠は、森づくり会場周辺と「みちくさ」の運営をしてきた舎人の放射能線量測定データである。ちなみに、2011年の線量は $0.31\mu\text{Sv/h}$ (測定器：環境放射線モニタ PA-1000)であった。現在は $0.13\mu\text{Sv/h}$ になっている。

「みちくさ」で出会っている方々は、ハイカー、釣り人、自然探索、歴史や環境学習の皆さんである。多い時には、年間400名程の出会いがあった。

一昨年、栃木県の百名山に認定された中倉山。この山の稜線には「無言の語り木(ブナ)」(一般的には「孤高のブナ」と言われている)が生きている。このブナを紹介できたのは、「みちくさ」で知り合ったUさんのお陰。今から数年前、「稜線に大きな木が生えているよ」との話を訊いて、早速、調査すると、ハゲ山になった悲しい歴史を幹に宿していることが分かり、ブナの生息環境は厳しい場所だということも分かった。今では、このブナから元気をもらおうと多くの方が登山している。

松木溪谷の沢にはロッククライマー、アイスクライマーが訪れるが、ラジオや携帯電話の電波状況は最悪で電気もない。事故が起きた時には足尾ダムゲートまで走らなければ電波は通じない。三井物産とイオン環境財団の助成金で太陽光発電が設置できた。電波はNTTドコモの協力を得て増幅器を設置した。滑落事故時や緊急時の連絡には役立っている。

「みちくさ」が雨漏りすれば、スタッフが屋根を作り、猫の額の畑には菊芋、ジャガイモ、蕎麦等を植えて愉しみ、訪問者には大谷石で休憩用のテーブルを提供しながら出会いを楽しんでいる。「みちくさ」当番の舎人の10年間の挑戦は、出会った人の心に木を植えている。「遊働楽舎」を運営してくれた舎人の皆さん、訪問者の皆さんに心から感謝し上げる。

舎人 高橋佳夫

心のふるさと探し

伝統野菜「舟石芋」と「唐風呂大根」を育てる足尾の森



ニュース等では、「先祖が遺してくれた畑だから・・・。」と言って田畑を大切にしている話を聴くことが多い。そんな時はいつも、それは間違いないが、実は先祖ではなくミミズや微生物たちの働きが田畑を豊かにしているのではないかとつぶつぶ言っています。

私が森づくりをしている足尾・松木沢は以前、松木村がありました。村は廃村になって、今は草地となり、そこにある祠が村人の暮らしを想起させてくれます。歴史を調べてみると、松木村人たちはこの地を耕し、狭い畑で農作物を育て、現金収入は桑の木で育てた蚕だったと言われています。

ところが、煙害で草木が育たなくなってしまう、村人は生活の糧を失い、村を離れざるをえなくなりました。村人は抵抗しましたが、松木村は廃村に追い込まれました。廃村から120年以上も経っていますが、松木村跡地は治山・緑化事業を施さなければ木々が生えにくい草地です。天然更新を待っていれば世界中を脅かしている気候変動による異常気象が、この地を荒廃地へと加速するのではないかと心配しています。

新型コロナウイルスが猛威を振るい、私たちの社会生活が大きく変化しようとしている時、足尾の町で二つの伝統野菜をつくり育てている人がいることを知りました。足尾の唐風呂集落には久保田さんが暮らしています。お会いして話を聞くと、伯母に勧められて町から自然豊かな唐風呂地区に転居をしたのが60歳の時であったと言います。健康管理を兼ねて、「自然農法を教わり、無農薬、無肥料で農作

物を育て、それを食べて自然豊かな所で過ごしていたら長生きできた」と、元気に笑っていました。

久保田さん宅には、「舟石芋」が元気に育ち、間もなく芋（ジャガイモ）が収穫できると言います。芋の収穫後は、「唐風呂大根」の種を蒔く予定だそうです。この大根は赤紫色ですが、唐風呂地区でしか赤紫色にならない、不思議な大根です。水分量が少ないので、栃木県の郷土料理“しもつかれ”との相性がぴったりだと言われています。

「舟石芋」は舟石峠付近で暮らしていた集落民の食料になっていたそうです。当時の集落は47軒の家が山間に点在していましたが、煙害と不便さ等で集落は残っていません。久保田さんをはじめその芋を好きな方々は、伝統野菜として大切に育てています。この「舟石芋」と「唐風呂大根」の栽培は、地域おこし協力隊の長澤美佳さんが足尾の街の活性化のひとつとしています。

私が思うに、舟石集落民にとっては唯一の芋だったと思います。狭い畑で集落民の命を育み、生活を支えたのは集落を囲む森と、森に棲む生きものたち、そしてこの循環が暮らしの一部にしてきた集落民の知恵があったのではないかと思います。負の歴史はそれを壊してしまいました。

伝統的な野菜の復活の試みにはそんな気持ちが窺えます。久保田さん、長澤さんのチャレンジに心から感謝して、収穫時期になりましたら、自然の恵みと人の心を味わいたいものです。改めて、森に寄り添う暮らしがあって生存があることを実感しています。

森づくりサポーター 橋倉喜一



森びと広報の森

足尾の植物と生活？

植物のことは英語では Plant（プラント）といいます。この語源はラテン語の Planta なのですが、これは種を蒔くときに土を平らにならすことから平らという意味の言葉 pleh から派生したものと考えられています。私たちが足尾で植樹する前にもまずは固い土壌の大きな石ころや古い根っこを取り除いて土を耕し、肥料を加えてから平らにならしてくれていますよね、おかげで植樹をする人は楽チンに苗を植えることができるのですが、まさかそれが大好きな植物の語源だったとは驚きました。

さて、英語で Plant と言ったときにもう一つの意味があることはご存知ですか。そう、石油プラントとか発電プラントというあのプラント、つまり工場という意味なのですがこちらの語源は何でしょうか？ 実は、同じ Plnata だったのです。植物がだんだん大きく育ち実を結ぶところから、同じように大きく育ち（設備を建設し）実を結ぶ（製品を製造する）工場をプラントと呼ぶようになったのです。今見る工場も、タンクや蒸留塔や煙突がありそれらの間をたくさんのパイプやケーブルが縦横無尽に繋いでいます。その姿はまるでどっしりと地に根を降ろし枝葉を伸ばして大きく成長していき、果実をつける植物や森のようではありませんか。

私は以前十年ほどプラントで使われている計器（注：お菓子のケーキではありません）を販売、メンテナンスする仕事に従っていたのですがプラントは生き物のようだとか常々感じていました。それを制



御しているのは人間です。正しく稼働していれば、一般に思われているほどには環境破壊はしていませんし、しないための設備改良を推進する企業努力も見てきました。しかし環境よりも経済や利益が優先されていた時代や、現在でも、事故が起きると有害物質が大量に放出されて私たちの生活に大きな被害が生まれてしまうのです。足尾銅山のように、被害が百年以上も続いているのを見るのは悲しいことですが、人間の過ちで荒廃した山と森と人々の生活をよみがえらせることができるのもまた人間です。

森びとプロジェクトの活動はまさに、プラントの敵をプラントで討つ、ということでもまったく筋が通っていて素晴らしいと思いますので、これからも人々の生活を守るためにも「山と心に木を植える」活動を一緒に続けていきましょう。今回はまず、プラントについてのお話でした。チャンチャン♪

会員 小黒久美子

事務所移転のお知らせ

このたび、経費削減の一環で、森びとプロジェクトの事務所を田端から目黒へ移転することになりました。森びとではお馴染みの、**目黒さつきビル**の3階になります。長らく変わらなかった**電話番号も変更になります**のでご注意ください。

<新住所>

〒141-0031

東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303 号室

TEL&FAX 03-6417-3750



森は友だち

6月だというのに猛暑日を観測した先月。夏の足尾森作業は蜂に注意しながら、炎天下での草刈りがメインになる。1畝50センチ程に生長した苗木の周囲の草刈りは必要ないが、植えて3年間の草刈りは絶対やらなければならない。草の生長の勢いに負けると、苗木は太陽の恵みがもらえない。放置すると衰弱して、やがて枯れる。私たちが育てている土地は、私たちが木を植える前は草との競争に負けた苗木を支えた竹だけが刺さっていた。塔婆が刺してある斜面の墓のようなであった。

「白沢の森」の最高地点までには600段もの階段を登らなければならない。草の背丈よりも低い苗木は、薄暗い草の中の蒸し風呂のような藪の中でじっと我慢している。傾斜が30度ある急斜面での機械操作は技がいる。不慣れな人は草と一緒に苗を刈ってしまう。そんなことを何度も経験したが、刈払い機での草刈りは捗るので機械を使いたくなる。反面、3年以上も生長していた苗木の幹や枝を伐ってしまうのが引ける。伐っても根が活着しているから苗木は枯れないが、森づくりは出発点に戻ってしまう。

炎天下の草刈りは、こんな気持ちと葛藤しながら鎌で草を刈る。藪は開け、松木川から吹き上げてくる爽やかな風が苗木の葉や枝を揺ると、まるで炎天下の身体を潤す爽やかな沢風が有難いと思う人間のように思える。一瞬、疲れを忘れられる。

今では、クマやサル、カモシカたちの大衆食堂や宿になっている森。木々は人間の葛藤と努力を裏切らない。森は人間の弱さを克服する精神を耕し、世界観を大きく育ててくれる。森は大切な友だち。

広報スタッフ 高橋佳夫

編集後記

梅雨の合間に植物に詳しい方々と多摩川を歩きました。秋に咲くはずの花が終わっていたり、実をつけていたり、草花の同定も今までのセオリーが通じないのだとか。

川沿いは隠れるところがないだけに開発や温暖化の影響が大きいのかかもしれません。普通に歩いているだけでレッドデータブックに載っている種がたくさん。ほんの数十年前には当たり前にあった花が、いまでは絶滅に瀕しているというのも驚きです。さらに歩いていると、まとまった範囲の林が伐採されていました。大雨で流木が下流に影響を与えとか理由があるのかかもしれませんが、一律広範に林を伐っ

てしまうのは本当に必要なんでしょうか。ちなみに川土手の草を刈るのは堤に穴が開いているのを見つけるためだそうで、これも他に方法がありそうな気がしま

す。ただでさえ、自然の多様性が失われている今、私たちは人が自然に及ぼす影響というものをもっと丁寧に見ていく必要があるのかなと思いました。「あれこれ、川柳はどうなった。」（「むかしから企画倒れをよくやる派」広報 小黒伸也）



森の木魂（こだま）第3号（2021年7月24日発行）



発行：森びとプロジェクト

発行人：中村幸人

編集人：森びとプロジェクト編集委員

第一版

〒141-0031

東京都品川区西五反田3-2-13 3F 303号室

TEL&FAX 03-6417-3750

<http://www.moribito.info/>

Email info@moribito.info

